■西欧の文字観

西欧の人々は、長い間、表音文字だけを用ひて来たから、「文字とはすべてかういふものだ」と思ひ込んでゐるらしい。だから、“本当の文字”である漢字を見ると、それが逆に異常な文字に見えるものらしいからおもしろいものだと思ふ。

ローマ字の二十六字に対して、漢字は何千字とある。桁が二桁も違ふのである。だから、“悪魔の文字”と見えるのも無理はないと思ふ。しかし、既に述べて来たやうに、文字は「言葉を直接表現できるもの」が本当の文字であって、表音文字は仮の借物なのである。

ところが、西欧の学者たちは、この事実に目を覆って、表音文字こそ進歩した文字であると言ひ張って来た。学者なら、この事実が解らないはずはないと思ふ。ただ、自分たちの使用してゐる文字が、価値の低いものだとは思ひたくない、ただそれだけの気持から、何とか理窟をつけて自分で自分を欺いてゐるのであらう。

良くても悪くても、伝統のある言葉や文字は変へてはならないものである。自分の親がどんなに悪い親であっても、親を変へることが出来ないやうに、言葉や文字は言はば自分を育ててくれた親であるから、否定することは出来ないものなのである。

だから、自分の親の短所を見ようとはしないで、極力長所を見付け出してこれを誇りに思はうとする、西欧の学者たちの態度は、事実として明らかに誤ってゐるけれども決して責めることは出来ないと思ふ。問題なのは、西欧の学者の主張につられて、理想的な文字を使ってゐるのにも関はらず、それを時代遅れの文字だと思ひ込み、この文字を棄てない限り、国際競争に負けてしまふ、と簡単に考へ込んでしまった我が国や中国の学者たちの態度の方である。